

---

# 知らなかったじゃ済まされない

詩響

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

知らなかったじゃ済まされない

### 【Nコード】

N9631R

### 【作者名】

詩響

### 【あらすじ】

夏休みが終わった頃。

ある山に近い町に、一人の少年が転校して来た。

穏やかで平和そうな町並とは裏腹に、其処には奇妙な噂があった。

「この町は人を食う」

人食いの町と呼ばれるその町の真実とは・・・？

## 始まり

「なあ」

「何だ？」

「お前さあ、知ってるか？」

「何を？」

「この町さあ・・・」

「人が消えるんだ」

引越してきて、一番初めに聞いた言葉。  
人が消える？

勿論、信じるはずはない。  
だって、そんなのあり得ない。

「唯の家出とかじゃなくて？」

今のこのご時世、学生の家出なんて良くある話。  
そんなのに一々大人も騒がない。

「時期に帰ってくるさ」

大人たちはみんなそんな感じで、暢気に子供を待ってる。

この町では違うのか？

消える？

騒ぎ過ぎなだけではないだろうか？

「唯の家出で済むなら、こんなに騒がれない。ホントなんだ。

この町は、人を食う」

人食いの町

そう呼ばれるこの町には、何か秘密がありそうだ。

転校初日。

俺はそう感じた。

信じたくはなかった

「カタシハヤ、エカセニクリニ、タメルサケ、テエヒ、アシエヒ、ワレシコニケリ・・・」

手を合わせ、唱える。

何度も、何度も。

大半の学校の始業式が終わり、町が活気を取り戻した8月のある日の夜。

町中でこの呪文が響き渡っていたという・・・。

何故だろう？

今日は朝から騒がしい。

煩いのはいつものことだが、今日の煩さはちよつと違う・・・。

「山崎！」

教室に向かう途中の廊下で呼ばれ、振り返ると、同じクラスの大木が居た。

彼は、俺が転校してきた時に、初めて声をかけてくれたヤツ。そして俺に、色々と町の事を教えてくれる奴。

「おはよー。なあ、何なんだよ？この騒ぎ・・・」

俺には何もわからない。

教えてくれ。

そういう感情を込めた眼で、大木を見た。

「お前・・・あゝそつかあ・・・知らねえんだった・・・」

大木は、始め驚いたような顔をした後、納得したという様にため息

を吐いた。

「・・・始めに言ったよな？この町は『人食いの町』だって始め？どの始・・・」

「ああ、転校初日の・・・」

「そうだ。で、昨日・・・この学校の女子が一人、食われたらしい」「えっ!？」

食われた？この学校の生徒が!？

だから、こんなに騒がしかった・・・。

「多分、明日・・・早ければ今日の夕方には、出てくるんじゃないかな」

出てくる・・・。

何が、なんて聞かなくてもわかるし、聞きたくもない。

だってその子は『食われた』んだ。

魚でも肉でも、食べた後には骨が残る。

それと・・・同じ。

俺は、身体が奥の奥から冷めて行く、そんな感じがした。

『人食いの町』

そんなの、誰だって信じたい訳がない。信じられる訳がない。

だけど実際に、食われた人が居る。

その現実が、何よりも恐ろしい。

「なあ、お前今生徒手帳持つてるか？」

「・・・？ああ・・・」

貸せ、と言った大木に、俺はそれを渡した。

何やら色ペンで書き込んでいる・・・。

「ほら」

「？何だコレ」

手帳のカレンダーになったページには、一ヶ月にいくつかずつ、日

付が丸で囲まれていた。

「この丸の付いた日には、夜に絶対に外に出るな。いいな？」

俺には意味がわからなかったが、大木があまりにも真剣な顔つきで言うから、頷くことしかできなかった。

## 闇の行進（前書き）

視点が「俺」では無くなります。

## 闇の行進

リンリンリン・・・

暗い街の中に、鈴の音が響いた。

リンリンリンリン・・・

静かな、静かな町。

昼は、あんなに賑やかなのにな。  
今はこんなにも静かだ。

リンリン

鈴の音が、止まる。

私の、目の前で。

ぼんやりと浮かんで見えるのは、鈴を持った狸。  
彼は、笑っていた。

「百鬼夜行に、参加しますね？」

問われて私は頷いた。

固より、逃げる術など存在しない。それに・・・  
逃げる必要など、無いのだから。

狸は私の答えに笑んで、列の一番後ろを示した。  
其処に並べ、そう言われているのだ。

黙って其処に行く途中、先に並んでいた者達が私に視線を投げる。

「・・・お久しぶりですね。水瀬 風華様」

恭しく皆の先頭に立って声をかけてきたのは、犬神族の長。  
ひっそりとした、優しそうな印象のおじいさんだ。

「色々と、忙しくて」

これ以上の詮索は無用、と暗に言う。

他の奴等も同じことを思っていたのか私に声をかけようとしていた  
が、今の一言で封じた。

「さあ、参りましょう」

先頭に立つ狸がまた、笑った。

百鬼夜行。

月に何度かある、妖怪の行進。

この日に用も無いのに来なかった妖怪は、追放される。  
つまり

人間でもなく、妖怪でもない中途半端な存在として、生き続けなければならぬのだ。

人間には忌み嫌われ。

妖怪には冷たい目で見られ。

この世のすべてに拒絶されて生きる羽目になる。

だから、この夜行に沢山の妖怪たちは参加するのだ。

私はこの日が嫌いだ。

夜行など、来たくない。

でも、そろそろ来ないと怪しまれるから。

そうならないように来ただけ。

今まで出てい無かったのも、来たくなかったから。

唯、それだけ。

リンリン・・・

再び鈴の音が鳴り始める。

さあ、長い夜の始まりだ・・・。

## 血の宴

「いやあああああ！！！！！！！！！」

嗚呼、何度聞いただろう？この断末魔を。

「さあ、どうぞ？」

何度見ただろう？

この、いやらしい、誇らしげな眼を。

夜行は、三時くらいに終わった。

だが、これからだ。地獄の時間は。

「皆さんもお気づきの通り・・・」

ほら。狸が笑ってる。獲物を見つけた、そんな目で。

まあ、獲物はホントに居るんだけど。

「今日の夜行に・・・紛れ込んでおります」

一斉に全員が、後ろから四番目に並んでいた少女を囲む。

皆人型をとっているけれど、私達は所詮妖怪。

人間の、敵。

「いや・・・い、や・・・」

少女が後ずさる。

だけど、逃げられはしない。

逃げることは・・・出来ない。

「さあ・・・宴の始まりです！！！！」

恍惚とした目の狸がそう叫ぶのと同時に。

血の宴は、幕を開けた。

人間一人では出られないであろう山の奥。

町には叫んでも聞こえないだろう、その場所で。

彼女は文字通り、食われる。

逃げようとした腕を掴まれ、生きたまま背を剥がされ。

仰向けにされ、中心から開かれる。

この頃にはもう、彼女の意識は痛みによってほぼ消えかかり、身体は痙攣を繰り返す。

そのまま内臓を引きずり出され、血を吸われ・・・

「風華様」

やってきたのは、其処に混ざって食っていた、蛇族の男。

「お召しにならないので？この年頃のは、真に美味にございますが・・・」

男の言葉に反応したのか否か。

今まで食べる事に夢中だった奴等が、私の周りに集まってきた。

「そうでございます。さあ、お召し下され」

そう言つて鬼族の頭は、手に乗せた心臓を私によこす。

「人間の心臓は、身体の中で一番美味なところにございますれば。さあ」

まだ動きのあるそれに。

生臭い人間の血の匂いに。

私は嫌悪感を覚えた。

「・・・いらん。人間は、嫌いだ。その血肉など一滴とて身体に入るつもりはない」

「・・・そうでございますか・・・」

納得しない、そんな顔をしながらも彼は、別の妖怪にそれを献上した。

妖怪に世界は、人間の世界と似ている。

身分、というものがあり、上の者に気に入られればそれだけ良い待遇が受けられる。

私は身分的に上の一族だから。

だからこうして、媚を売られるのだ。

先ほどの行動も、彼等は良かれと思ってやったのだ。

実際、私の一族の者でなければ喜んだ事だろう。

しかし私にとっては嫌なことだったのだ。

早く終わらないだろうか・・・？

そう思いながら私は、ただ感覚を閉ざした。

探してみよう・・・か？（前書き）

視点が「俺」に戻ります

探してみよう・・・か？

「見つかったらしいぜ」

そう言われたのは、五時間目の授業のあとの休み時間だった。携帯で随時情報の確認をしていた大木は、俺に知らせてきた。見つかったらしい。

昨日行方不明になった（食われた、らしい）この学校の女生徒が。見つかった・・・のか。何処で？」

「いつもと同じ・・・山の奥だそうだ」

人間一人では入ったら最後、迷うような山奥だそうだ。いつも、そこで見つかるらしい。

「また、白骨だってよ」

「・・・そうか」

俺はそんな返事しか返せなかった。

誰だってそうだろう？

何か返せるはずがない。

だって、こんな話なのだから。

「・・・見つかったんだ」

俺達の話聞いていたのか、突然声がした。

「・・・水瀬」

顔を上げるといたのは、同じクラスの水瀬 風華。

このクラスの学級委員で、成績優秀、スポーツ万能。

その上、容姿端麗。

何もかもが完璧なヤツ。

だが、その素性は不明。

不思議な空気を纏っている。

「一組の松田さんだって。それ」

「マジかよ・・・。ってか何で知ってんだ？」

「さあ？」

微笑してはぐらかすが、本当に、何故知っているのだろうか？

教師たちは表に出さないようにしているし、まだ見つかって数時間。情報だってそんなに出回っていないだろう。

何より、死体の判定自体が出来ているか定かではないのに・・・。

何故彼女は知っているのか？

彼女は本当に不思議だ。

「大木君から聞いてるでしょ？危険な日」

「・・・う、うん」

「だったらその日には、夜の外出はしないことをお勧めする。・・・こんなことになりたくなければね」

「わかった・・・」

水瀬さんの言葉に頷く。

大木から教えてもらった日付け。

その日に、一体何があるのか。

俺には分からないけれど、それでも。

なんだか危険か物が、この町にはあると感じた。

守る（前書き）

「俺」視点ではありません

## 守る

「ただいま」

山のずつとずつと奥にある、私の家。

人間なんて、絶対に入って来られない。

・・・私は人間じゃないから。

だから、此処で暮らしてる。

「おかえりなさいませ。風華様」

「ああ」

そのまま私は、この屋敷の奥にある大部屋に向かう。

「亜樹羅様」

「お？帰ったか？入れ」

「失礼いたします」

部屋の奥に座しているのは、この屋敷の主。

そして、妖怪を束ねる長。

「どうだ？人間は・・・」

「・・・相変わらずです」

「・・・そうか」

長は、悲しそうな顔をする。

「このままでは・・・」

「ああ・・・いずれ人間を・・・」

こんな長の顔は、見たくない。

折角綺麗な顔をしてるのに、歪んでしまうから。

・・・笑っていてほしい。

「夜行では、狂い始めた妖怪たちが増えています。もう、何時人間に奇襲をかけてもおかしくありません」

しかし、コレが現実。

もとは仲よく共存していた私達。

それなのに人間は、私たちの存在を消そうとする。  
妖怪たちは、それに腹を立てているのだ。

何故、認めてもらえなくなったのか。

何故、私達を当たり前の物として認識してしまったのか。

「昨夜の夜行に、人間が混ざっていたのですが・・・ひどかったです」

「食らったんだっとな」

「はい。今夜行に來ているのは、主に身分の低い妖怪。狐などは、姿を見せていませんでした」

「だから・・・止める者がいない、か・・・」  
「はい」

止めるものが居ないからこそ、人間を襲うのだ。

誰かが、止めなければいけない・・・。

「私が、止めに・・・」

人間は嫌いだ。

だけど、この人の役に立つためなら・・・。

「いいのか？お前は人間が嫌いだろう？そう簡単に克服はされないだろう」

「それでも、行きます。貴方を・・・守りたい」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9631r/>

---

知らなかったじゃ済まされない

2011年10月8日22時04分発行